Shumei International





Shumei International is dedicated to improving the human community by restoring the environment, fostering a deep appreciation of beauty and the arts and cultivating leadership among the next generation.

The organization was founded on the philosophy of Mokichi Okada, who taught that cultivating respect for nature and appreciation of the inherent beauty in the natural world will uplift human society and enable a truly balanced and sustainable world.

Shumei International has established programs around the world

Shumei International has established programs around the world with a focus on Natural Agriculture.

Shumei International

NEWSLETTER

Vol.19



【表紙】 Shumeiザンビア・プロジェクトのディレクター アラン・今井とベンバの子どもたち



秀明インターナショナルは、1.国際協力 2.環境問題への 取り組み 3.優れた芸術による人心の向上の3点を基本的 なプログラムとして実践します。この実践により、個々の人 間性、精神性の向上を促し、社会へ新しい人生観、価値観 を提唱したいと考えています。そして、私たちと同様の目的を 持つ世界中の人たち、団体と協力し合い、世界平和に貢献していくことを目指しています。



- 3 Harmony with Nature オックスフォード農業会議 アリス・カニングハム (秀明インターナショナル理事)
- 7 ザンビア 教育支援プロジェクト2019 宮本 麻美(教育支援スタッフ)
- 12 秀明自然農法支援 タンザニア・さくら女子中学校2020 酒井 賢治(秀明自然農法ネットワーク)
- 14 Shumei人材育成研修 インド・ナヴダーニャ
- 18 SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ第9回定例会合 in熊本
- 20 秀明太鼓 復興支援コンサート ~「鎮魂」そして「感謝と祈りの音」~ 多田 立伊(秀明岩手ボランティア担当)



会場となったオックスフォード市民ホール

オックスフォード農業会議



2020.1.8~9 秀明インターナショナル理事 アリス・カニングハム

このたび、イギリスのオックスフォードで開催された農業 会議 (Oxford Real Farming Conference) に秀明太鼓メ ンバーと共に参加させていただきました。オープニングで 太鼓演奏を披露した後、総会において、Harmony with Nature (自然との調和) についてお話しする機会を頂きま した。

Harmony with Nature 自然との調和

Shumei にとって太鼓は祈りであり、調和そして平和への願 いを神様にささげる神聖なものです。太鼓によって表現され る水、風、雨、稲妻などは私たちを自然界へと導き、四季折々 の姿を感じさせてくれます。自然界に宿る精霊たちへの祈り です。Shumeiにとってそれは神聖な儀式であり、美しくパワ フルな太鼓の音は私たちと自然をつなぐ懸け橋なのです。



オープニングセレモニーで秀明太鼓の演奏



それはまさに地球の鼓動であり、生きとし生けるもの全てと 母なる地球との調和を反映しています。

私たちの祖先は日々の生活が自然と密接に関係しているこ とを理解し、自然との関係を聖なるものであると捉えていまし た。自然を敬うことの大切さを理解していたのです。先住民 の人々はこの神聖な関係を今も引き継ぎ、自然の法則に従い、 自然から得た叡智を彼らの文化に組み入れてきました。しか し現代社会に生きる私たちの多くは、この自然との聖なる関 係を失くしてしまっています。

今日、多くの人々は日々私たちが食している食べ物がどのよ うに作られ、どこから来ているかを全く知りません。私たち が生きていくために欠かせない食べ物への意識が薄れている だけでなく、食を取り巻く社会構成に対する認識が乏しくなっ ています。と同時に私たち一人ひとりの行動が環境や社会に どのような影響を及ぼすかという認識が足りないのが現状で す。しかし今、世界は、貧困、飢餓、感染病、生物多様性 の消失、気候変動などの多くの問題を抱えており、その対策 は急を要します。これらの問題に対する意識は少しずつ高ま りつつありますが、今まさに解決策が求められています。

会場内で使用されるエコカップ

これらの問題を考えるとき、大切なのはその問題の根源が どこにあるかということです。自然との調和を乱されたことが 問題の根源ではないでしょうか? 自然界には自然の法則に 沿った絶妙で微妙なバランスが保たれています。その一つで もバランスが崩れると、その影響はドミノ式に他へも悪影響 をもたらします。まさに今、このバランスが壊れてきているの です。自然界に存在する全ての生き物にはそれぞれの役目が あり、全てはつながっているのです。日本には昔から自然界 と人が調和の取れた共存社会「里山」がありました。この自 然との共存を掲げる「里山」コンセプトが今、見直されてき ています。

私たちが掲げる自然農法の基本理念は、自然尊重、自然 順応で、まさに自然との共存です。自然農法は単なる農法で はなく、生き方なのです。自然と調和した生き方を営むことで、 自然界に対する考え方、捉え方が変わります。そしてそれは 日々の生活にも影響を及ぼします。自然の中で過ごす時間を 増やすことで心身共に活性化され、普段気にも止めなかった 周りの環境への関心が高まり、自然に対する感謝の心が育ま れます。



スピーチするアリス・カニングハム



左からザンビア自然農法開発プログラム代表のバーバラ・ハチブカさん、アリス・カニングハム、英国土壌協会ベン・ラスキン氏

食べ物を単なる必需品(必要栄養素)、商品と見るのではなく、自然からの恵みであると感じるようになります。そしてそれは自然と作物を育てる農家への理解と感謝を育みます。 農家もまた、感謝で作物を食べてくれる人々への感謝が生まれ、感謝の循環が起きるのです。

自然農法の実施者は自然を観察し、自然から学ぶ姿勢を 崩しません。常に圃場を観察し、作物の成長をサポートする ことに専念します。自然の力、作物、土壌、種の力を信じ、 一切の肥料や農薬等を使用しません。また、生物多様性の 重要性を認識し、多様性を保つよう心掛けます。

単一文化ではなく多様性を重視した文化の構築が必要です。ひたすら同じ作物だけが生産されている光景のどこが自然でしょうか? どこに多様性があるのでしょうか? 産業型農業による広大な面積の単一栽培は単一文化を生み出し、自然界のバランスを崩します。また、巨大企業は遺伝子組み換え作物や種の普及を推し進め、在来種を絶滅または絶滅



の危機にさらしています。何が自然で何が不自然なのか? 私たちは自然の法則に逆らい、自然との調和を乱し、結果そ の代償を払っているのです。

自然界では全ての生き物が共存し、それぞれが役割を担っています。私たちは皆つながっているのです。今、まさに母なる地球とのつながりを、関係を見つめ直すべく、意識改革が必要とされています。母なる地球を敬い、この生態系の住人としての役割を認識すべきです。意識改革を促す方法の一つが美による感化ではないでしょうか? 美しいものに触れることで、心が豊かになり、魂が向上します。美はいろいろな形で表現されます。美しい風景や建物、川のせせらぎや優しい雨の音、香り、心温まる行為、笑顔など五感を通じて美を体験することによって、周りの人や周りの環境との調和を望むようになるのではないでしょうか。

精神性を育み、美による感化、美しいものに触れることを 心掛け、自然を敬い、自然との調和を意識した生き方を行う ことで、社会を取り巻くさまざまな課題を乗り越える知識を、 力を、心構えを養うことができます。自然との調和を基盤とし た生き方こそが今最も必要とされています。

最後に岡田茂吉師の言葉で締めくくりたいと思います。 『すべては自然が教えている』



追記

今、世界は新型コロナウイルス感染によるパンデミックの 恐怖にさらされています。

既に多くの命が失われたことに心から哀悼の意を表したい と思います。そして今も世界中で新型コロナウイルスに苦しむ 方々が一日も早く回復されることを祈ります。

2020年1月にイギリスのオックスフォードで、このプレゼンテーションを行ったときはまさか今のように世界中がパンデミックの恐怖にさらされることになるとは思いもしませんでした。なぜこんなことになったのでしょうか? いろいろな説はあると思います。このパンデミックの問題の根源はどこにあるのでしょうか? これはまさに自然界から私たちへの警鐘ではないでしょうか。

森林伐採や生物多様性の減少により、生態系のバランスが 崩れ、維持されてきた境界線が失われています。と同時に多 くの病原菌が発生しています。自然との調和が崩れ、地球の 健全性が失われてきています。結果、私たち人間の健康も脅 かされています。自然界の法則に逆らうことで、負の要素が 蓄積されてきています。。

今回の新型コロナウイルスを終息させたとしても、また新たな病原菌が現れないとも言えません。だからこそ、今まさに地球との向き合い方、自然との向き合い方を考え直す時ではないでしょうか。負の要素を取り除き美しい地球を取り戻すときにきていると思います。私たちは生態系の一部であり、私たちの行動は善きにしろ悪しきにしろそのまま生態系に影響を及ぼします。母なる地球のためにも、私たちの未来のため

にも、Harmony with Nature (自然との調和) を基盤とした 社会の構築が求められていると思います。



秀明太鼓

1985年に結成。横笛の第一人者である藤舎名生氏に師事。 2000年、ニューヨーク国連本部における世界宗教者会議のオープニング演奏をはじめ、メトロポリタン美術館、南アフリカで行われた万国宗教会議、愛・地球博(愛知万博)、岩手大槌町復興支援公演など活動を展開。また、毎年「地球自然の詩」と題して国内コンサートツアーを開催。一太鼓を叩いて「世界平和の心」を伝えたいーこれが秀明太鼓の願いです。

ウェブサイト

https://www.shumei.or.jp/shumeitaiko/



ザンビア 教育支援プロジェクト2019





2019年、世界各地に異常気象による被害が発生する中、 アフリカ南部は雨不足による干ばつが深刻化しました。FAO (国際連合食糧農業機関) は、過去35年で最悪の干ばつ であると指摘し、「4.500万人が厳しい食料不安に直面する」 と警鐘を鳴らしました。アフリカ南部に位置するザンビアは 穀物生産が前年比の15%減となり、ルング大統領は「自国 のような開発途上国は気候変動に最も影響を受けるが、そ の結果に対処する能力は最も小さい」とコメントしました。

2005年より Shumei が支援しているザンビアのムババラ 地区でも、干ばつに強い秀明自然農法で栽培された在来種 のメイズがほとんど収穫することができず、次年度に植える 種の緊急支援をすることになりました。

SDGs (国連が提唱する持続可能な開発目標) では17の 目標の一つとして「質の高い教育をみんなに」と掲げられて いますが、2020年現在、世界中の子どもの半数以上、推 定6億1.700万の子どもが読解と数学の最低限の習熟基準 を満たしていないと言われています。安定した社会生活を得 るためには、読解などの基礎的な教育が欠かせません。そ のような教育を受けていないことこそが、仕事の機会を失わ せ、貧困の悪循環と連鎖を生み出しています。

ザンビアの義務教育は、日本の小学校に当たる7歳~13 歳の7年間です。その後、中等教育が5年間ありますが、都 市部と比べると地方ではそれほど進学率は高くありません。 2016年1月、Shumeiはそんな状況にある地方のペンバ地区に、 初の小学校の開校を支援いたしました。そしてこのたび、「感 性を育む教育に貢献したい」と、日本の小学校教諭の経験が ある2名の女性スタッフを派遣し、教育支援を行いました。





学校を美しくすることが 子どもたちを育む

教育支援スタッフ 宮本 麻美

2019年10月22日から11月15日まで、ザンビアペンバ地区の小学校への教育支援に行かせていただきました。今回の訪問で「学校を美しく、学習環境を整える」ことを一つの目標としました。

現地に到着後、すぐにザンビア自然農法プロジェクトのディレクターであるアラン・今井とムババラ女性農民組合のミーティングに出席しました。その年の干ばつは非常に厳しく、この地域一帯では翌年にまくメイズ(トウモロコシ)の種が全く無いということでした。そこで Shumei としては、種を購入するために募金活動を行い、種に余裕のある農家を探して種を買い、組合の各家庭に少しずつ配るよう支援策を検討しました。その後、掃除道具など今回の活動に必要な備品をそろえ、ペンバ地区に移動しました。

ザンビア訪問は、2015 年第 10 回自然農法ショーの参加 より 2 回目でした。小学校に着くと子どもたちが元気に迎え てくれました。私は期待と緊張の気持ちでいっぱいでした。 このペンバの小学校は、2016 年 1 月に開校し、今年で 4 年目になります。1 学年 1 クラス 30 人程度、現在は全校で 120人です。教師は校長先生を含め4人、教師一人が1クラスを担当しています。小学校のスタートは朝早く、7時からの始まりに向けて子どもたちは30~60分かけて歩いて登校してきます。授業は昼過ぎに終了し給食は無く、1割弱の子どもたちはお弁当を持参し、それを食べて帰宅します。



手形で木の絵を描く

1日1食で過ごす子どもたちも少なくありません。私たちは 学校の近くの宿舎を借り、そこから学校に通うことになりま した。

学校訪問の初日、校長先生はじめ、先生方とミーティングをしました。「学校を美しく、学習環境を整える」ことについて話し、学校を美しくすることを心掛け実行していくことで、家でも身の回りを美しく清潔にすることが身に付き、健康面や精神面に良い影響を与えると説明しました。すると先生方は理解してくださったように感じました。

早速翌日から下校前に各教室の掃除の時間を設けることになりました。全ての机や椅子を教室の外に出して拭き上げ、教室内の床は砂を掃き出し、きれいに拭き上げました。校長先生も校長室を掃除し、模様替えまでされ、とてもきれいになってうれしいと喜んでおられました。

しかし、学校のプロジェクトがスタートして驚いたことは、 授業時間でも教室に先生が居ないことが多く、気が付けば 子どもたちもみんな外に出て教室は空っぽという状態がよく ありました。こんな状態できちんと活動ができるのだろうか と不安になり、私は先生方に対する不満な気持ちがでてき ました。

私はどうしたらよいのだろうと悩みました。その日の放課後、「まず自分が変わろう。何かさせていただこう」と、トイレ掃除のための雑巾を作ることしにました。ちょうどそのとき、校長先生が私たちの滞在していた宿舎を訪ねて来られました。私は小学校の教諭をしていた経験もあり、校長先生に Shumei のこと、教育についてなどをお話しすることができました。

その翌日から別の先生が、朝の集合の整列や脱ぎっぱな しだった靴もきちんとそろえるように指導し、学校の雰囲気 が良くなりました。その先生の教室の掃除はとても丁寧で、 床の隅々まで掃き拭きをし、机も真っすぐに並べられていま す。子どもたちもそれを見習っていました。

また教室用靴下を用意しました。これは子どもたちは靴を

脱いで教室に入りますが、野外を裸足で過ごすことも多く、 どうしても教室内に砂が入ってしまうため、教室内をきれい に保つために試験的に導入しました。ザンビアでは靴下を 履く習慣がないので子どもたちは最初戸惑っている様子でし たが、数日後には慣れたようでした。

元々この地域には学校は無く、子どもたちは学校に行っていなかったので開校にあたっては、地域の方々から大変喜ばれたと聞いています。しかし、子どもたちは数字の概念が理解できていなくて、学びの理解度の低さを感じ、ザンビアの農村部の現状を目の当たりにしました。

実際、図工と音楽の授業もさせていただきました。子どもたちの感性を養いたいと思いました。図工の授業ではクレヨンで絵を描いたり、絵の具で点描をしたり、手形を取って、それを葉っぱに見立て、みんなで一つの木の絵を作成したりしました。子どもたちは集中し、たくさんの色に触れながら楽しんでいるようでした。音楽の授業ではリコーダーやカスタネット、ハンドベルなどの楽器に触れ、先生たちも一緒に練習しました。ザンビアの人たちは歌や踊りが好きなので、音楽会が開けたらと考えていました。学校滞在の最終日には校舎前の広場にて「ロンドン橋」を歌と手拍子も交えながら皆で合奏することができました。楽器を日本から持って行ったことは先生からも喜ばれ、さまざまな機会で演奏することもでき、農民たちと交流する良いきっかけとなりました。

ペンバ地区に着いてから、支援の在り方についてずっと考えていました。たくさんの人から、「通勤のための自転車を買ってほしい」とか、「新しい教会を建ててほしい」と言われたり、他の学校からも「机や椅子が不足している」と言われました。物質面での不足が多いことは事実ですが、子どもが生きる上で必要な教育とは何か?子どもたちに本当に幸せになってほしいと思いました。今、私たちにできることは美を取り入れた教育です。子どもたちが身の回りを美しく、掃除を身に付けられること、そして芸術を楽しみ、豊かな心を育んでいってほしいと願っています。



初めて触る鍵盤ハーモニカに興味津々



楽しみながらお掃除



カレーを食べる子どもたち



教室用靴下の洗濯

その他に、子どもたちにカレーライスの振る舞いを行いま した。校長先生が声を掛けて集まったお母さん方6人と協 力してカレー作りをしました。子どもたちは「おいしい!」と、 とても喜んでくれました。たくさん作ったので、子どもたち は家族のためにカレーを持ち帰っていました。

この2週間の滞在の意義を考えたとき、大きな成果は無 かったかも知れませんが、先生は、「掃除を学ぶことで、家 でも掃除ができるようになり、自分の周りの環境も美しくす ることができるようになるから、これからも毎日続けていく」 と言っていました。



手作りのほうきで掃き掃除



使った道具はきれいに洗う

生活面においては、不便はありましたが、学校の近くに 住んでいる先生や村の方たちのおかげで安心して生活がで きました。毎日誰かが宿舎を訪ねてきてくれました。「私た ちを気に掛けてくれる人たちがいる」と思えました。都会で は都会の幸せがあり、村では村の幸せがあると感じました。 村の人たちと一緒に過ごせたことで、支援の在り方とは、一 時的ではなく永遠的な目で見て、その人に合った幸せな生き 方を一緒に探していくことなのだと感じました。今後も世界 の情勢にしっかり目を向け、活動していきます。



校長のメアリーさん (中央)



子どもたちの作品

ペンバ小学校・校長先生に聞く



Q1: どうして小学校の先生になろうと思ったのですか?

A1: 私は高校卒業後カレッジの教員養成課程で3年間学びました。教員になって最初に政府から派遣されたところが農村地帯でした。私は都会育ちなので、初めはなかなか慣れなくてつらいこともありました。でも今では、自然に囲まれた村落の暮らしにすっかり慣れました。私が小学校の先生になろうと決めたのは、児童教育に熱い思いがあり、何よりも子どもたちと接することが大好きだからです。

Q2: Shumeiの教育プロブラムはどうでしたか?

A2:図工はとても興味深く楽しめました。音楽はリコーダーは少し難しかったですが、ベルや鍵盤ハーモニカは良かったです。先生たちも楽しめました。図工も音楽もこれからも続けていきたいです。掃除も良かったです。今までは毎日汚かった教室が、毎日掃除することでいつもきれいです。とても大きな変化です。学校で掃除すると、自分の周りの環境もきれいにできる子どもたちが育ちます。そうすると地域もきれいになります。それによって衛生の重要性も分かります。

Q3:子どもたちがどのように成長してほしいですか?

A3:一人ひとりの才能を伸ばし、人を助けられる人になって ほしいです。学業だけでなく、高い道徳観念と価値観を 育んでもらいたいです。そうすることが、子どもたちが大 人になったとき社会生活に良く適合することにつながる と思うからです。そしてザンビアの発展に貢献してほし いです。

Q4: ザンビアの発展に重要なことはなんですか?

A4: 畜産も含めた持続可能な農業です。それは直接生活に関わってくることだからです。そのための勉強も大切です。また農業は定年した後でも始めることができます。それから英語教育です。今は5年生から英語が始まります。都市部の人は英語を話し、働くときも英語がとても大切になっていきます。

Q5:Shumeiに望むことは?

A5: Shumeiの皆さんの素晴らしい活動と支援に心から感謝しています。今回、Shumeiのスタッフが同じコミュニティの中で生活しながら共に考え、活動できたことはとても良かったと思います。できたら、もっと滞在していただき、授業の教え方なども学びたいと思いました。新しい教室や、各教室の棚、楽器、新しい先生の家など学校は足りないものがたくさんあります。これからもこの学校へのサポートを続けていただけたらと願っています。







秀明自然農法支援 タンザニア・さくら女子中学校 2020 🖤

秀明自然農法ネットワーク 酒井 賢治

2020年3月、Shumei が支援するタンザニアのさくら女子中学校の圃場で、トウモロコシ(メイズ)の種まきが行われ、学校理事長のフリーダ・トミトさんよりうれしいメッセージを頂きました。

2016年の学校開校当時から Shumei の支援にとても感謝しています。

現在、さくら女子中学校では、新型コロナウイルスの影響を受け、臨時休校しています。しかし、その中でも秀明自然農法で栽培している主食のトウモロコシは元気に育っています!(6月29日より学校は再開しました)

昨年は Shumei が支援しているザンビア農民の方々が種まきの指導に来てくださり、学生たちと種まきをしました。 学生たちは貴重な体験ができました。しかし、干ばつで雨が降らずトウモロコシを収穫することができませんでした。

タンザニアでは、例年雨季の3月にトウモロコシの種をまき、8月中旬ごろ収穫します。3月12日、学校から車で1時間ほど離れた圃場に3年生16名を連れて行きました。昨年の干ばつのこともあり、今年は、1エーカーのみ種まきを行いました。種子は秀明自然農法で栽培された在来種のトウモロコシを使用しました。生徒たちは喜んで種まきをしました。

今年、隣国のケニアではバッタの異常発生が大きな問題

DEMOCRATIC
REPUBLIC
OF THE CONGO

TANZANIA

ANGOLA

ZAMBIA

ZIMBABWE

MADAGASCAR

NAMIBIA

BOTSWANA

となっていますが、私たちの地区ではバッタの被害はありません。ただ、一般の農家では遺伝子組み換えのトウモロコシが虫に食べられてしまい、農薬をまいて駆除をしています。しかし私たちの秀明自然農法の圃場も少しは虫の被害はありますが問題ありません。農薬や肥料を使わなくても立派に育っています。

昨年10月から順調に雨は降っています。しかし、いつまで降り続いてくれるかとても心配しています。今後も雨が降り無事に収穫できますように、私たちと一緒にお祈りしていただければうれしいです。



学校理事長のフリーダ・トミトさん

フリーダさんの メッセージ 動画はコチラから





一般の農家は虫の被害で農薬を散布(ハイブリット F1 コーン使用)



自然農法で栽培された在来種の種



発芽 (秀明自然農法で栽培)



虫に負けず立派に育つ



ケニアで撮影されたサバクトビバッタ

©Reuters

©Reut

バッタ大量発生による食料危機

2019 年後半以降、気候変動による多雨により、東アフリカでは大量のバッタが発生し農作物を食い荒らす被害が深刻化している。国連によると、最も被害が深刻なケニアでは1000 億~2000 億匹のバッタが約2400 平方キロメートルの範囲で農作物を襲っているという。

さくら女子中学校とは…

この学校はタンザニアの将来を担う女性リーダーの育成をモットーに、慶応義塾大学名誉教授の岩男壽美子先生が中心となり、日本政府の ODA (政府開発援助)の協力により設立されました。現在、一般社団法人キリマンジャロの会と現地 NGO 団体によって共同運営されています。



さくら女子中学校 校舎



Shumei 人材育成研修 インド・ナヴダーニャ

2019年9月28日~10月8日、ヴァンダナ・シヴァ博士にご招待いただき、大学生3名とMIHO美学院中等教育学校の高校1年生3名、スタッフ2名が、ナヴダーニャ主催のイベントに参加しました。

研修生は、事前にインドの基本的な情報やナヴダーニャの 活動について学び、また、Shumeiの活動や秀明自然農法の ことを英語で発信できるよう準備しました。

今回参加したのは、首都ニューデリーで毎年行われている「ブーミー・フェスティバル」と、ウッタラーカンド州デラドゥンにあるナヴダーニャの圃場で行われた「ガンディー・コース」です。2019年はインド独立運動の父であるマハトマ・ガンディーの生誕150周年に当たり、どちらのイベントもテーマはガンディーの訴えた「非暴力」でした。

ブーミー・フェスティバルでは「非暴力」をテーマにした 講演やインドの伝統的なダンス・歌などの発表が行われ、 Shumei からは「肥料も農薬も使用しない秀明自然農法を推進し、"自然への非暴力"を実行している」という内容のショート・スピーチをしました。そして会場の入り口に Shumei のブースを出し、学生たちが作成した秀明自然農法の紹介ポスターを掲示したり、活動紹介のパンフレットを配布したりしました。また日本文化の紹介として書道のパフォーマンスも行いました。 翌日、ナヴダーニャの圃場兼研修施設に移動し、ガンディーの思想を学ぶ「ガンディー・コース」に参加しました。ナヴダーニャでは年に数回このような研修が開催されており、他にも「有機農業に関するワークショップ」や「生物多様性」「国民総幸福量(GNH)」などいろいろなテーマで行われています。今回の「ガンディー・コース」にはヨーロッパ、アメリカなど世界中のさまざまな国から約20名参加しており、研修生たちは事前に勉強してきた英語を使って、積極的にコミュニケーションを取ることができたようです。

この研修プログラムでは、シヴァ博士と長年共に活動されているサティシュ・クマール氏が講義をしてくださいました。サティシュさんは環境活動家でその活動の根底にはガンディーの思想があります。研修生たちはサティシュさんの英語の講義を全て理解することは難しかったと思いますが、サティシュさんのパワフルな言葉に聞き入って、とても感銘を受けたようでした。また、今回の旅を通して、清潔とは言えないインドの街並みや、物乞いする人たちを目の当たりにし、いろいろなことを考えるきっかけになったようで大きな学びを得たのではないかと思います。

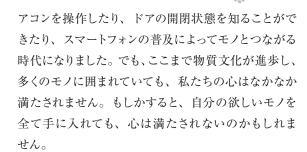
自ら作り手になることが大切

大阪大学 4年 松下 桃子

インドでは、車道での車の割り込みが絶えず、秩序は全くありません。至るところにゴミが落ちています。 そんな汚いところがある反面、とても美しい建築物もたくさんありました。タージ・マハルは私の想像以上に美しく、とても感動しました。その他にもイスラム教のモスクやバハイ教の礼拝堂など美しい建物をたくさん見ました。

ブーミー・フェスティバルで、自然農法の紹介パネルや書道パフォーマンスは多くの方が興味を持たれ、喜んでくださり私もとてもうれしかったです。

ナヴダーニャでのサティシュさんのお話は、本当に素晴らしくて感動しました。一番印象に残っているのは、「自分の手でモノを作りなさい」というお話です。私たちには2本の手があります。この手で私たちはタネをまき、作物を育てることができるし、家を建てることさえできます。しかし、現代の人々は2本の手をスマートフォン操作に使っています。また、私たちは工場で大量に生産されたものを購入します。でも、その製品には愛はありません。日本はモノであふれていて、とても便利だと思います。出掛け先から自宅のエ



サティシュさんは「満足感というものはあなたの手を使って、何かを作ることによって得られる」とおっしゃっていました。モノを作ることによって、愛が生まれる。機械が作ったものを消費するただの消費者ではなく、作り手(maker)にならなければならない、というお話にとても感動しました。今の自分の生活を考え、少しでも日常生活に取り入れることができればと思いました。まずは自分が食べる作物を育てるところから始めたいと思いました。

今回のインド研修は、自分の知らない世界をこの目で見て、体感することができて、私にとってかけがえのない経験になりました。



ブーミー・フェスティバル会場



秀明自然農法のポスター



書道のパフォーマンス



ブーミー・フェスティバル会場で



インドの現状は 私たちがつくり上げた

MIHO 美学院 4年生 島川 結衣



インド研修に申し込んだ理由は2つあります。一つはインドの刺繍などに使われる伝統的な柄や模様を見て、自分のデザインの創造力を広げること。二つ目は開発途上国と言われているインドでは今、どのようなことが問題となっているのか。人々がどのような暮らしをしているのか、自分の目で見て、体験し感じたいと思ったことです。

研修1日目、バスでホテルに向かっている途中、一人の少女が窓越しから私たちに向かって踊りを披露してくれました。私はその踊りに感動し見続けていました。しかし同行していたスタッフの方に「お金を求められるから、あまり見ないほうがいい」と言われました。そのとき、インドではこんな遅い時間まで、お金を稼ぐために働いている子どもがいるのだと改めて思いました。世界中には、学校に行くことができず、朝昼晩食事が取れない人たちが大勢いるということも知っていましたが、実際にそのような人を見るとこれまでの自分の生活習慣や考え方を変えていかなければいけないと心から思いました。

インドの街中を歩いていると当たり前のように見る物をいの姿、また布と段ボールで作った家で過ごしている人々の姿。私が見ているこのインドの現状はインドに住んでいる人だけでは変えられない。私たち、先進国である周りの国々が協力しないといけないと思

い、将来このインドの現状を変えられるように、もう1 度インドを訪問すると決めました。そして今のインドの 現状は地球に住んでいる私たちがつくり上げたのだと 思いました。

サティシュ・クマール氏の講演では「遠くの国から 輸入すべきではない。衣服でも自分たちの国で生産し たものを使うべきだ」と。「安いポリエステル製のもの などを輸入すると、自分たちの国で伝統的な織物を 作っている人たちの仕事が奪われてしまう」と。私は この言葉を聞いたとき、私が着ている服一つでも貧富 の差をつくってしまっていると思いました。本当に世界 の平和を望むのであれば、こういう小さなことからで も自分から動かなければいけないと思いました。

今回インド研修に参加させていただいたことで、自 分自身強くなることができました。インドでは生活に 苦しみながら生きている人が何人もいることから、普 段私が学校生活で悩んでいることがちっぽけに感じ、 こんなことで悩むのであれば「もっと大きなことで悩め」と自分に言い聞かせることができるようになりまし た。今の自分の環境に感謝し、今私が何の不自由も なく生きているこの瞬間でも世界のどこかでは苦しん でいる人がいるということを忘れずに残りの学校生活 を学びの多いものにしたいと思います。



サティシュさんの講義



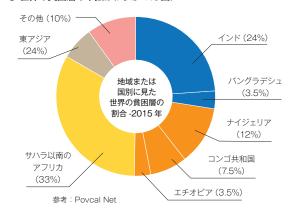
ナヴダーニャの圃場

インド研修 Q&A

Q1:インドは開発途上国なの?

A1: 急速な経済発展する新興国BRICs (ブラジル・ロシア・インド・中国) の一つであるインドはGDP (国内総生産) の額で現在世界5位。2028年までに日本とドイツを追い抜き、世界3位の経済大国になると予測されています。一方で2018年の世界で飢餓状態にある約8億人の4分の1に当たる2億人のインドの人々が栄養不足に陥っているといわれ、経済格差が大きな問題となっています。また、インドの教育調査機関ASER Centreの報告によるとインドの農村部では小学2年生に当たる年齢で簡単な単語が読めない子ども、2桁の引き算ができない子どもがどちらも8割いるといわれている状況です。

● 世界の貧困層の半数はわずか5カ国に



Q2:Shumeiとナヴダーニャ財団の関係は?

A2:ナヴダーニャ財団は、1987年、世界的環境活動家ヴァ ンダナ・シヴァ博士により設立された、生物多様性や種 子の保全に取り組んでいる団体です。Shumeiは2009 年12月コペンハーゲンで開催されたCOP15 (気候変 動枠組条約第15回締約国会議)にて、シヴァ博士を Shumeiの分科会にゲストパネリストとして招聘。その 後、2011年4月、同じ志を持つ団体としてパートーナー シップを締結。国内では生命の源である種を尊重し守 る「SEED FREEDOM」活動を展開、東京、福島、兵 庫、滋賀で講演会を行いました。2012年、ブラジルで行 われたリオ+20 (国連持続可能な開発会議) に合わせ、 書籍「Visions of the Living Earth (母なる地球のビ ジョン)」を共同で発行。続いてビジョンシリーズとして、 「Visions of the Living Seed (母なる種のビジョン) | 「Visions of the Living Soil (母なる土のビジョン)」 を発行しています。



シードフリーダム講演会の フライヤー



Visions of the Living Earth

Q3: サティシュ・クマール氏ってどんな人?

A3: イギリス在住の思想家。エコロジー&スピリチュアル雑誌「リサージェンス&エコノミスト」名誉編集長。1936年、インド西部のラージャスターン州に生まれ、9歳で出家しジャイナ教の修行僧となる。18歳のとき還俗し、社会変革活動に携わる。E.F.シューマッハー (イギリスの経済学者、「スモール・イズ・ビューティフル」の著者)とマハトマ・ガンディーの思想を引き継ぎ、1991年、イギリス南西部に「シューマッハー・カレッジ」を創設。真に持続可能で豊かな社会を創り出していくための国際的な教育機関として世界中から参加者が集まっている。



ガンディー・コース修了証を渡すサティシュ・クマール氏

Q4: ブーミー・フェスディバルとは?

A4: ブーミー (Bhoomi) とはヒンディー語で「地球」という意味で、ナヴダーニャ財団と、インディア・インターナショナル・センターが共催で、毎年1回行われている地球環境について考えるイベント。インド内外から約300人が参加しました。今回はガンディー生誕150年を記念して「非暴力」をテーマに行われた。



ブーミー・フェスティ バルのポスター



SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ 第9回定例会合 in熊本

2019 年 9 月 3 日~ 5 日、熊本にて行われた SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ定例会合に、秀明インターナショナルより 3 名が参加しました。2018 年に金沢で行われた定例会合に引き続き 2 度目の参加となりました。

SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ (IPSI) は、日本の"里山"がコンセプトです。"里山"とは人が手を入れることによって管理してきた、農地や林などの二次的自然環境を指します。包括的な視点でこの二次的自然環境を守ることにより、独自の生態系を守り、生物多様性保全と人間の福利向上を促します。地域の特異性に配慮しながら、人間と自然とが持続可能な関係を保持した、「自然共生社会」の実現を目指しているのがこの SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップです。2010年、愛知で行われた生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)を機に、日本の環境省と国連大学サステイナビリティ高等研究

所 (UNU-IAS) によって設立されました。

3日間に渡って行われたこの定例会合では、総会、基調講演、一般の方も参加できる公開フォーラム等が行われましたが、テーマ別のワークショップが会合の中心です。参加メンバーは、十数人ずつのグループに分かれ、それぞれのテーマについて話し合い、課題、提案等をまとめました。テーマは「生物多様性と文化の多様性」「SDGs との連携」「持続可能な農業」「海岸の管理」他、教育、コミュニケーション、ジェンダーなど多岐にわたり、合計で15のテーマについて話し合われました。日本のみならず海外からも多くの参加があり、会議は全て英語で行われました。今回のワークショップでまとめられた内容は、2020年10月に行われる予定の生物多様性条約の会議にて、新しい枠組みを決める際に、SATOYAMAイニシアティブからの提案として提出されることとなっています。





ワークショップの様子

秀明インターナショナルは、自然との調和に基づく社会づくりを目指しています。私たちが推進する秀明自然農法は自然尊重、自然順応を基盤とし、農薬や肥料などを一切投入することのない農法です。地域の生態系を守ることで、SATOYAMAイニシアティブが重視する生物多様性に貢献しています。このたびのワークショップの「持続可能な農業」や「土壌劣化と回復」などのテーマにおいては、自然農法活動から得た具体的な体験に基づく成功例などを紹介しました。今後も、「里山」コンセプトを生かした活動を通して、SATOYAMAイニシアティブの目指す、「自然共生社会」の実現に積極的に貢献していきたいと思います。



現在、SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップには世界各国の環境省、研究機関、地方自治体、NGO など 250 以上の団体が加盟しています。パートナーシップに加盟するには、その団体の活動の詳細を記入した申請書を提出し、加盟後にはケース・スタディ(活動事例)を提出する必要があります。秀明インターナショナルは 2018 年にパートナーシップに加盟し、ザンビアの自然農法支援活動および、他団体との協力のもとに行われているフィリピンでの自然農法活動をケース・スタディとして提出しました。現在 SATOYAMA イニシアティブのウェブサイトにケース・スタディとして掲載されています(英語版のみ)。

SATOYAMA イニシアティブ
https://satoyama-initiative.org/ja/



2019年11月24日 岩手県花巻市東和総合福祉センターで3年目となる秀明太鼓コンサートが行われました。

「秀明太鼓の願い― 太鼓を通して"世界平和の心"を伝えること。

感謝と祈りで叩く太鼓の響きは、言葉、習慣、人種、そ して価値観の違いをも超えて、あらゆる人の琴線に触れると 信じています」

このメッセージには、秀明太鼓が演奏する各地でのコンサートに対する強い思いが込められています。

忘れえぬ 2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災は、被災地となった岩手県、その県民である私に、復興のための活動を地道に継続するという歩みと学びを与えてくれました。震災直後より Shumei は被災地でのボランティアをはじめ、さまざまな支援活動を継続してきました。活動を通じてつながった方々の多大なご協力を頂き、2017 年より毎年被災地および県内で「秀明太鼓コンサート」の演奏が実現しています。

特に2017年8月22日に行われた、岩手県上閉伊郡大槌町における初めての秀明太鼓コンサートは、被災地支援に携わる者として、言葉に表せない感激のコンサートになりま



した。

それは、このコンサートの目的が「大槌町から秀明太鼓の音を通して発信する多くの震災犠牲者への"鎮魂"の祈り」にあったからです。

大槌町は、当時さまざまな理由から、他の被災地に比べて復興が立ち遅れていました。その大槌町でコンサートを行うことは、会場や集客などを考えると難しいと思いましたが、ボランティアからつながった大槌町の方々に心を込めて相談し、意見を出し合いました。すると、心ある被災者の皆さんが自発的に秀明太鼓コンサートの準備に動かれました。コンサートチラシの写真や案内文など一緒に考えました。加え



2018年 太鼓ワークショップ

て大槌町役場がコンサートの後援に入ることになり、役場 広報課の協力により、8月の大槌町広報紙と一緒に秀明太 鼓のチラシが町の全5,085世帯に届けられました。「秀明太 鼓による鎮魂の祈り」のメッセージが、まずはチラシを通じ て大槌町の隅々まで間配られたと感じました。

また、コンサート会場が奇しくも毎年3月11日に震災の追悼式が行われる、大槌町役場会議場(震災前は小学校体育館)に決まったこともご縁を感じました。コンサートの準備はShumeiのメンバーと被災者が全員協力、一体となっての取り組みとなり、成功を目指して本番を迎えました。

コンサートは大槌町出身で自身も被災者であるミュージシャン、大久保正人氏により60年ぶりに「なんどえ」という大槌町に伝わる祝いの唄が尺八の演奏から始まり、降りしきる雨の音が太鼓と共鳴するかの如く、迫力の音の中に幽玄的な趣があり、まさに"鎮魂"を感じる演奏であり、最後まで静と動が入り交じる素晴らしいコンサートとなりました。また、途中休憩時間の中で被災者の方に太鼓を叩いてもらうワークショップが行われ、太鼓メンバーが呼び掛けるとすぐに大槌町長平野公三氏はじめたくさんの方が前に出て、盛況で楽しい交流の場となりました。



2018年 東和町 コンサートポスター

以下、来場した方々の感想の一部です。

- ・演奏が終わると、後ろの老婦人が「生きてて良かった!」 とおっしゃっていて、私もうれしくなりました。秀明太鼓 演奏は被災地へ向けての温かいメッセージ。感謝!
- ・演奏の音が招魂の音に感じ、たくさんの亡くなった方た ちが来ているのかなと思い、うれしくて涙が出ました。津 波のことも忘れる思いです。
- ・太鼓の中から神が降りて来るように感じました。戦争の 無い平和な世界にと、全世界の人たちに響いてほしい!
- ・別世界に来た感じになった。この活動を何十年、何百年 と引き継いでほしい。
- ・大槌の夜空に響き渡る太鼓、笛、鐘。これが秀明太鼓か。芯まで伝わってくる激しい音、そして静寂の間。東日本大震災で亡くなった多数の魂を弔ってくれているようにも聞こえる。いや、祈ってくれてありがとう。楽しませてくれてありがとう。ぜひ、また来てほしい!

このコンサートに「風の電話」オーナーの佐々木格さんも来られました。「風の電話」は大槌町に実在し、亡くなった人と電話線の無い黒電話で会話をするという残された人への癒やしのスポットで、本年映画が上映されベルリン国際映画祭特別賞を受賞しました。佐々木さんは、「魂に深く強く響く、この秀明太鼓の音の根本は神への祈りです。このことは本当に素晴らしいこと。この音は世界に通用する世界共通の音楽です」と話されました。

また秀明太鼓はコンサート以外にも、被災地におけるボランティア活動、小学校での訪問演奏、子どもたちに和太鼓のワークショップなども行いました。

そして、この大槌町のコンサートからつながる形で、翌 2018 年からは岩手県内陸部にある花巻市東和町でも秀明 太鼓コンサートが行われました。



2018年 東和町 コンサート会場





多田さん(中央)とグロッセさん夫婦

花巻市は、家を失った大槌町の被災者の受け入れが特に多い町ですが、花巻市東和町に住む園芸療法士のグロッセ世津子さんが、Shumei 岩手ボランティアの活動と秀明太鼓の演奏に感銘を受けられ「秀明太鼓の笛の音は天空の音、太鼓の音は地殻の音、素晴らしいエネルギーがある。ぜひ、一人でも多くの人に秀明太鼓を体験してほしい。東和町においてもコンサートを実現したい!」という強い思いから、東和町の有志と共に「秀明太鼓コンサートin 東和・実行委員会」を立ち上げ、2018年7月21日にコンサートが行われました。当日は、震災復興の願いを込めて演奏者と観客が一体となり、まさに「感謝と祈りの音」と表現するにふさわしい演奏となりました。



2017年 大槌町 チラシ

Shumei 岩手ボランティア活動からご縁を頂いた佐々木格さん、大久保正人さん、グロッセ世津子さんをはじめとする多くの人たちは、地球環境を考え、世界平和を望み、その社会実現のために各自ができる努力を積み重ねている人たちです。現在、自分自身がそのような人たちと助け合い、互いに協力し合い、活動できることに心から感謝しています。

この秀明太鼓コンサートを通じ、今後ますます Shumei と志を同じくする人々との関係を大切に、より深め、「感謝と祈りの心」を胸に、共に活動していきます。



〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代353-1 TEL:0748-82-3140 FAX:0748-82-3143 E-mail: info@nposhumei.or.jp https://www.nposhumei.or.jp



